

かかる主査ありき

2009.4.1

中村悌次

それはもう40年近く昔の話になった。(筆者註:組織名や職位は当時のものでお許しを請う)当時私は海幕防衛部長をしていて、各種の業務に忙殺されていたが、概算要求の時期になり、例の如く、海上自衛隊としてはもっとも緊急と考える要求を提出した。この年の目玉と言うべき要求は3つあった。第一は厚木基地の共同使用が可能となったことに伴い、下総にあった作戦部隊を厚木に移し、その後に宇都宮にあった教育航空集団司令部をはじめとする各地の教育部隊をもってくるほか、かねての懸案であったその他の航空部隊の基地を整理整頓しようというもので、これを航空基地の振り回しと称した。第二は、自隊造修能力の保有である。当時の造船活況の下、自衛艦の修理整備はなかなか相手にしてもらえず、担当者の努力にもかかわらず適時適切な修理にはほど遠く、そのしわは部隊に寄せられ、計画通りの訓練ができないだけでなく、訓練中の故障も続出した。自隊造修能力を持ちたいということは、海上自衛隊発足以来の悲願ともいえるべきものであったが、横須賀SRFの一部共同使用が可能となったことにより、その道が開け、所要の人員機材の取得により、かねての問題を解決しようというのであった。第三は、SFシステムを取得して、船、飛行機に加え、陸上のコマンド、コントロールシステムの開発に着手しようとしたことであった。

従来は8月に概算要求を大蔵省に提出、9、10月と担当の経補部を中心に、事務的な説明、折衝が行われ、11月頃になって防衛部も関与して突っ込んだ折衝が行われるのが通常であったが、このときは9月半ば頃突然大蔵省担当主査から私に電話があって「SRFと航空基地移動のどちらを重視するのか」「定員要求を認めなくてもSRFはやるのか」との質問があった。そこで内田海幕長のご内意も伺って「SRFと航空基地移動はいずれも重要であるが、どうしても一度にできないということであれば、基地移動の一部は翌年度早々に実施することを条件にして翌年度に見送らざるをえない」「海上自衛隊の人の苦しさは他自衛隊と比較されれば、すぐおわかりになると思う。したがってこの定員化については格別のご配慮をいただいたいところであるが、最悪の場合人がつかなくともSRFはやります」と回答した。主査は「腹を聞いて非常に安心した。予算は直接使う人がもっとも切実に必要としているところにつけるというのが私の考えだ。だからこういうことを聞いてみたのだ」とのことで、それ以後この主査とは腹を割って話をすることができた。12月に主査がこられて「DEと差し違えるならSFシステムを認めても良い」との話で、これも内田海幕長に報告し、いろいろ苦慮の末、この主査の時とっておかないといつ予算化できるか分からないと、SFシステムをとることにした。(このときあきらめたDEは、その後田代(一正)経理局長(のち次官)の尽力もあり復活したが、もともと主査がSFシステム要求の切実さを知るためのテストであったかもしれない)。かつてある主査から、「国民はそんなことを望んでいない」とこちらの切実な要求を却下され、あいつがあいつ国民の代表になったかと、悔し涙を呑んだ経験のある私は、同じ大蔵省の主査でも随分違うものだと、あらためて敬意を覚えたことである。この主査こそ伊吹文明氏であった。

伊吹さんはその後渡邊(ミッチー)大臣の秘書官をやられたことを契機に政界に転じられ、今や自民党の領袖の一人として重きをなしておられる。先日産経新聞で首相を論じられたなかに「日本が如何にあるべきかとの歴史観に裏付けされた政治理念で国民に問いかけないといけない」「与党の政

治家も人をあげつらい自分だけいい子になる姿勢だと自分が傷つくことを自覚しないとだめだ」「政治家が誰のために仕事をしているんだ、国家のためだという雰囲気は希薄ではないか」といった言葉から、常に自分の仕事の原点を顧みる伊吹さんの風格が少しも変わっていないことを知った。政治の世界は決して単純ではないであろうが、伊吹さんのような人がある限り、日本の政治も、自民党もまだまだ捨てたものではないと思うことである。